

# 戦時国民統合の国際的契機

## 昭和13年のふたつの富士登山をめぐる

佐藤 弘  
松本 武彦

### 1. はじめに

第2次世界大戦をめぐる、日本とドイツの同床異夢の象徴とも言える1936(昭和11)年11月の日独防共協定締結から、41年12月に日本がマレー半島・真珠湾を攻撃してアジア太平洋戦争の開戦をみるまでの内外の動きは、きわめて錯綜しつつも、ある意味でふたつの大きな流れに集約して理解することができるように思われる。ひとつは国際関係としての日独伊枢軸関係強化の流れであり、もうひとつは日中戦争の本格化・泥沼化に対応した国内戦時体制の整備・強化の流れである。37年7月盧溝橋事件が起こっていわゆる日華事変となり、日本と中国の関係は、政治的にはもちろん軍事的にも抜き差しならぬ状況に陥入する一方、同11月には、前年の日独協定にイタリアが加わって、日独伊防共協定の締結となる。38年4月、日本では国家総動員法が公布され、日中戦争の本格化を背景に戦時体制の形成・強化がはかられたが、ヨーロッパでは39年8月に独ソ不可侵条約が結ばれ、日本にも大きな政治的・軍事的影響を与えた。同9月、ドイツのポーランド侵攻によって第2次世界大戦が勃発し、日独関係では、おおむね38年から39年にかけて、いわゆる日独伊防共協定強化問題が生起するが、同床異夢はますます昂進することになり、翌40年9月、日独伊三国同盟の条約調印となる。同時期から、日独伊ソ四国協定構想が浮上したりはするが、日独伊三国の関係強化は、結局アメリカの反枢軸という態度を決定的にして、同国の参戦という新しい事態を招き寄せ、アジア太平洋戦争の開戦につながるようになっていった。

さて、従来、枢軸関係強化と国内戦時体制の整備・強化というふたつの流れに関して、個々には多くの研究が積み重ねられてきている<sup>(1)</sup>が、必ずしも相互の有機的関連性はあまり意識されず、個別的に理解される傾向にある。そこで、本稿では、1938(昭和13)年7月17・18日におこなわれた、日独伊親善協会主催の防共盟邦親善富士登山

隊の防共富士登山と、同年8月20・21日におこなわれた日独青少年団交歓会（文部省所管）主催のヒトラー・ユーゲント歓迎野営の一環としての富士登山という、昭和13年に主として外国人によって防共などを標榜してなされたふたつの富士登山に注目し、それらが戦時下の日本に如何なる影響を与えたのか、特に、戦時下の国民統合に果たした役割について検討をおこなってみたい。

なお、ヒトラー・ユーゲント来日の実態関係とその意義については、中道寿一氏による先駆的な研究があり、主として日本の青年団運動の再編・統合に与えた役割・意義といった観点からの実証的考察を行っている<sup>(2)</sup>が、富士登山そのものについてはまとまった論及がなされていない。

## 2. 防共盟邦親善富士登山隊の防共富士登山

上述のように、37年11月、日独伊防共協定が調印されるが、翌38年には、すぐさま日独防共協定を軍事同盟に強化拡充しようとするいわゆる「日独伊防共協定強化問題」<sup>(3)</sup>が発生する。これは同年1月の「国民政府を相手とせず」という近衛声明が、日中戦争を泥沼の長期戦へと陥らせたことに対し、陸軍中央部は、唯一の活路として、防共協定強化を名目とする日独軍事同盟の締結を求めたからである。そして、この強化問題は、軍部だけでなく外務省の事務当局も検討を開始していた。

このような日独伊防共協定の成立を契機としてのことと思われるが、日独伊親善協会が結成されることとなる<sup>(4)</sup>。

同会の主な事業は、防共すなわちコミンテルン排撃の宣伝と、日独伊の親善で、『防共事情』などの書籍の発行<sup>(5)</sup>や以下にとりあげる「防共盟邦親善富士登山」や、「防共親善宗教連盟会議」(38年9月)<sup>(6)</sup>などを主催している。

「防共盟邦親善富士登山」とは、日独伊親善協会が「“防共聖戦”支那事変一周年を記念するためニッポンのシンボル霊峰富士に登山、その山頂高く防共には結ばれる日・独・伊・満・西五ヶ国の国旗を翻えし東亜の大空に向かって『防共バンザイ』を高らかに叫ぶために計画したものであった<sup>(7)</sup>。これは、外務省情報部、陸軍省新聞班の後援を受けており、当初は、上記引用文中の5ヶ国の青年の参加が予定されていたが、実際には、更にハンガリーと「新興中国」の青年が加わり、総勢7ヶ国40余名となっていた<sup>(8)</sup>。

一行は、7月18日、新宿駅に集合し、プラットフォームで記念写真を撮影した後、小笠原長生子爵<sup>9)</sup>の「防共バンザイ」の声に送られて、8時31分新宿駅を出発した<sup>10)</sup>。途中、大月駅で「防共親善列車」と書き入れてある富士山麓電鉄の特別列車に乗り換え、沿線各駅での歓呼にこたえつつ、11時30分、富士吉田駅に到着した。

富士吉田駅には、地元の国防婦人会、在郷軍人分会、福地小学校児童など300人余が出迎え、これに対し、一行のうち代表が駅前広場で防共親善の挨拶をおこない、福地村青年団プラスバンドを先頭に、富士浅間神社まで行進した。同神社で参拝の後、地元山梨県および福地村主催の野外歓迎会に臨み、その後富士登山バスに馬返まで分乗し、富士登山へと出発した。富士浅間神社では、山中湖畔で満州国留日学生会が主催しておこなわれていた夏期修練の満洲国人参加者が合流し<sup>11)</sup>、一行はドイツ大使館書記官・在京ヒトラー・ユーゲント代表・イタリア大使館員・中国留学生・満州国大使館武官・満州国留学生・ハンガリー代表・スペイン代表それに日本の東京文理大・慶応・立教・日本医大など大学生代表によって構成されることとなった。同夜は8回目の富士ホテルに宿泊した。

翌18日、午前4時、富士ホテルを出発した一行は、途中でご来光を拝した後、同6時山頂に到着し、お鉢廻りをおこない、浅間神社奥宮前に集合した。一行は、各国国歌を合唱しつつ国旗を掲揚し、防共の宣誓をおこない、「皇軍」将兵に感謝の黙祷をおこない、天皇および各国元首の万歳を唱えて、乾杯し、各国元首へ打電の後、予て用意してきた菱刈隆大将・徳富蘇峰・小笠原子爵らの揮毫した防共額を奉納した。東京農業大学学生鈴木某が読み上げた防共の宣誓は、『東京朝日新聞』によれば、次のようなものだった。「防共宣言 吾等防共盟邦は人類の敵コミンテルンを断乎排撃し防共精神の発揚と盟邦の親善強化を誓ふと共に防共聖戦將士に満腔の感謝の意を表す」<sup>12)</sup>。こうして午前9時御殿場口に向って下山の途についた。

御殿場町に到着したのは午後0時30分であったが、ここでも静岡県庁の学務部長、社会教育課長、地元町長、国防婦人会、御殿場実業学校生徒、小学校児童などの歓迎をうけている。一行は北口（山梨県側）と同様に浅間神社に至り、県と御殿場町共同主催の歓迎会に臨んだ。ドイツのラインホルト・シュルツェが、「世界の聖山富士山に加盟国の代表が登ることは誠に有意義」であると挨拶した。盛大な歓迎会の後、一行が東京へ向けて御殿場駅を出発したのは3時57分のことであった。

以上の行程には各国の新聞や通信社の特派員が同行し、日本の新聞社は山頂からの

電話や伝書鳩を使って記事を送稿するなど、連日在京各紙や地元紙が競って報道した。

### 3. ヒトラー・ユーゲントの富士登山

日独伊親善協会主催の防共富士登山から約1ヶ月後の、8月20日・21日の両日、同月中旬から日本を訪れていたヒトラー・ユーゲントの一行が、富士登山をおこなった。団長ラインホルト・シュルツェはドイツ青少年指導庁本部付の33歳で、1ヶ月前の防共富士登山参加者でもあった。その他の団員は34歳から16歳の30人で、8月16日横浜港外に到着して17日に上陸し、10月12日に神戸港を出港するまで、北海道から九州までほぼ日本全国を訪問した<sup>13</sup>。

このヒトラー・ユーゲントの来日は、次のような経緯によるものだった。すなわち、36（昭和11）年11月に日独防共協定が締結されると、翌11月に、ドイツ青少年指導統監バルドウル・フォン・シーラムから、駐ドイツ武者小路大使に対して日本の青少年団員とヒトラー・ユーゲントの相互派遣の申し出があり、日本側所管官庁である文部省が外務省を通じて調整にあたり、37年9月にドイツ青少年指導庁を代表して来日したシュルツェとも協議して実現したもので、日本としては、「防共協定に依って結ばれた日独両国の親善関係に一層の拍車を掛けるもので」あり、「我が国青少年団運動に対しても之が振興並に拡大強化を促進する上に適切」であるとともに、「我が国固有の文化を紹介する上に於ても洵に意義深いものがある」と認識しており<sup>14</sup>、また、ドイツ側も「国際的交歓の強化」に必要なものとの認識だったとされている<sup>15</sup>。

上述の如く、17日に横浜に上陸すると、ヒトラー・ユーゲントは直ちに入京し、船旅の疲れを癒す暇もなく19日には、日独青少年団交歓会主催のヒトラー・ユーゲント歓迎野営に参加するため、鉄道で山梨県富士北麓の山中湖畔に向かった<sup>16</sup>。途中、山梨県の学務部長が中央本線上野原駅まで出迎え、中央本線から分岐する大月駅には、大月町町長や男女青年団員・都留中学校生徒・町民など400人余が集まり、人波でホームはごった返した。沿線では農夫や老人が万歳や右手を挙げる敬礼で出迎え、禾生駅では小学生が花束を渡すと、シュルツェ団長がひとりを抱き上げ頬擦りした。また、谷村駅では谷村の男女青年団・小中学生・国防婦人会会員・消防団員が歓迎し、「ドイツ青年団の歌」のレコードがかけられるなか谷村町青年団から甲斐絹に墨絵で

描いた富士山の絵画が贈られ、雰囲気盛り上げた。一行は、富士山が「電車の窓口に現われるや異口同音にフジヤマを連発」しつつ、富士吉田駅に到着した。駅前には「富士をバックに交叉された日の丸とハーケンクロイツがはためく歓迎のアーチ」が造られ、県視学・吉田警察署長・吉田・福地・船津の小学校児童・在郷軍人会員などが出迎える中、福地青年団のプラスバンドを先頭に富士信仰の象徴とも言える金鳥居まで行進した後、バス2台に分乗して山中湖に向かうと、避暑のために滞在していたドイツ人30人余も歓迎のために顔を見せた。

一行は、正午過ぎに山中湖畔のホテルに到着すると山梨県知事による歓迎昼食会が開かれ、「永劫動かざる我が日本国体の姿であり純真明開なる日本精神の象徴である富士山の麓においてここに歓迎の衷情を披瀝する機会を得ましたことは頗る欣悦する所であります云々」<sup>17</sup>との知事の挨拶がなされ、午後2時、山中湖畔旭ヶ丘の日本青年館分館清溪寮内キャンプ場に入り歓迎式に臨み、大日本少年団聯盟の約400人、帝国少年団協会の約80人と交歓し、午後9時就寝した<sup>18</sup>。

翌20日昼過ぎ、ヒトラー・ユージェントの一行31人は、日本人少年団員260名とともに、富士浅間神社に参拝した後、吉田口より富士登山を開始し、同日午後7時30分頃8合目に宿泊。21日は早くも午前4時には8合目を発って、5時30分頃山頂に立ってご来光を拝した<sup>19</sup>。

彼らは、某デパートから贈られた地下足袋を履き、菅笠を被り、金剛杖を突いて登山した。山頂では「ご来迎を拝して日本精神の認識を染あげるおはち廻り」<sup>20</sup>をおこない、浅間神社奥宮に参拝。日独両国国歌を合唱し、宮城を遥拝、日独両国の隆盛を祈って黙祷し、万歳を三唱した。

登頂は山梨県側の吉田口だったが、下山は静岡県側の御殿場口よりおこない、午後1時静岡県の青年団とも交歓の後、2時30分山中湖畔のキャンプ場に帰着し、その日は湖畔のホテルに投宿した<sup>21</sup>。

22日には、キャンプ場の閉場を済ませたあと富士五湖巡りをおこない、23日、富士吉田駅を出発し、到着時と逆に大月駅を目指して車窓の人となった。途中の谷村駅では日の丸の旗にサインを求める者、朝顔の鉢を贈る者などに見送られ、大月駅では、大月町青年団員や中学生の見送りの中、中央本線に乗り換えた。中央本線を西下し、甲府・韮崎・小淵沢などを経て、午後3時33分、長野県の軽井沢駅に到着した<sup>22</sup>。

こうして富士北麓での4泊5日の旅程は終了し、「ブロードの髪が房々と風に揺れ」

<sup>23</sup>る31人のドイツ人青年達は、揃いの「細かい格子の白い麻服」<sup>24</sup>に身を包み、「明日のドイツを背負ふ素晴らしい肉体、親しみ深い微笑」<sup>25</sup>を人々に印象的に残して、富士の峰から麓までを颯爽と駆け抜けていったのである。

後に、ヒトラー・ユージェントのひとり、富士北麓に滞在した感想を、次のように記している。すなわち、「富士山に於いて、私達は唯日本に於てのみ味はふことの出来る、永遠の美の中に輝いてゐる日の出を見ることが出来ました。大きな盆の様な太陽が山々のあなたからゆるゆると上って来るに連れて、光はグングンと地上に拡がって行きます。そして、日本の人々がこの太陽に向って怒涛の様な万歳を叫んだ時、私達にはじめて何故この山が聖なる山と呼ばれたかの理由が明らかになったのであります」<sup>26</sup>と。富士山あるいは富士登山に対する日本人の特別な感情については、他の団員も気づいており、副団長レデッカーは、これをいわゆる「日本精神」と結びつけて考え、新聞記者から日本精神を感じた具体的な場所や行動について問われて、「宮城遥拝」などで日本精神が感じられたと答え、さらに「富士山二登山シタガアノ荘厳サナド何レモ日本精神ノ現ハレト見ルコトガ出来ル」と述べている<sup>27</sup>。団長シュルツェも、地元紙記者の取材に対して、「吾々両国の共産主義、マルキシズムに対抗する共通の精神が吾々を結ばせた」としたうえで、富士登山の印象を、「頂上に登って如何に日本の国民が富士を霊峰として尊敬するか、その精神を身を以て体験した、フジの偉大と日本の偉大な精神を体得した事は一生忘れられぬ印象である」と語っている<sup>28</sup>。

報道は、約1ヶ月前の防共富士登山に劣らず盛んで、新聞各紙は連日関係記事を掲載し、NHKはローカル枠ではあったがラジオで、一行の甲府駅到着とその歓迎の模様を伝える15分間の実況中継番組を放送した<sup>29</sup>。

#### 4. 昭和戦前期の富士登山

表は、各種史料<sup>30</sup>によって明らかになった、昭和戦前期の山梨県側吉田口からの登山者数である。一般人の富士登山は、ほとんどが7月から8月末ないし9月初めまでに限られており、これらの数値も、備考欄に注記が無い限りこの期間の登山者数である。昭和初年にはせいぜい3・4万人台で推移していた吉田口からの富士登山者は、36（昭和11）年頃から増加傾向を見せ37年には10万人に達する勢いを示している。さ

らに40年には10万人を突破し、42年には20万人に迫っている。しかし、43年、44年と年を追って激減し、おそらくこの傾向は45年においても継続したと思われる。

こうした登山者数増減の推移は、いわゆる十五年戦争の戦局の推移に見事に符合している。すなわち、10万人に達する勢いを示した37年には7月に盧溝橋事件が起こって、日中戦争が本格化している。また、39年から40年にかけては中国大陸での戦闘が続く一方、ノモンハン事件が起こる。42年は、言うまでも無く前年末にアジア太平洋戦争の開戦をみている。そして、大陸や太平洋での戦局の悪化と、富士登山者の減少が、

やはり軌を一にしているのである。敗戦の年45年には、7月30日と8月13日の2回、富士山頂は米軍機による機銃掃射の攻撃を受けた<sup>31)</sup>。富士登山ですら、空襲の被害を受けかねない危険なものとなったのである。

では、十五年戦争の節目ごとに人々を富士山にひきつけたその誘因は何だったのだろうか。登山者が3万人から4万人に留まっていた最後の年である35年、地元紙『山梨日日新聞』は、次のような登山に関する解説記事を掲げている。すなわち、富士山や南アルプスに多くの登山客を集めている当時の状況に対して、「登山熱は社会生活の複雑化と、ビジネスの単調化と正比例して、高まって行く」ものであり、「それは鬱積した感情の大掃除であり、自由を望む籠の鳥の一日、或は三日の清遊だ」としている<sup>32)</sup>。つまり、この記事では、富士山をはじめ各地での登山が、観光化して、管理社会からの一時の逃避手段としてとらえられていたのである。

しかし、外国人たちによるふたつの富士登山があった38年には、全く違った意義が唱えられ始めた。同じく地元紙の『山梨毎日新聞』は、前年から日中戦争が本格化し

表 吉田口年次別富士登山者数(人)

年次	登山者数	備考
1928(昭和3)	32,367	
1929(4)	45,565	
1930(5)	36,262	
1931(6)	42,707	
1932(7)	42,856	
1933(8)	47,661	
1934(9)	37,409	
1935(10)	39,646	
1936(11)	71,356	吉田署調査
1937(12)	98,000	推定値
1938(13)	53,000	8月中のみの推定値
1939(14)	85,120	
1940(15)	108,583	
1941(16)	83,734	
1942(17)	197,413	
1943(18)	87,322	8月26日までの数値
1944(19)	30,000	推定値
1945(20)		不明

て、登山者自体は減少傾向にあるが、記事の時点で富士登山だけは増加していることが「今年の特異な現象」とし、その背景を「霊峰の靈氣にふれて、戦時下国民としての精神力を養はんとする非常時色と見られてゐる」と記す<sup>33</sup>。他の記事によれば、富士登山者は、「いづれも日章旗、または皇軍武運長久祈願旗を先頭に皇軍をしのんで」登山しており<sup>34</sup>、なかには大阪の平井某のように、60貫（約200kg）の碑石に「国威宣揚」と刻んで山頂まで運び上げ建立する者もあった<sup>35</sup>。そうした戦時色を強く反映した登山は、南アルプスでも計画された<sup>36</sup>。39年以降も状況は同様で、39年には「大日本弓道会」の会長が防共登山に同行して富士山頂から白羽の矢を放つ行事が企画されたり、徴兵検査合格の御礼登山、国防婦人会の武運長久祈願の登山等々、吉田口はカーキ色一色となり、中腹の山室では食料が売り切れ、山小屋は予定外の客を断った<sup>37</sup>。東京方面から殺到する登山者が多数であったため、山梨県側のほぼ唯一の交通機関であった「富士山麓電車の五輛運転では到底呑みきれず、デッキ、便所といはず通路、洗面所、機関車の横腹までぎっしり乗込んで震災当時そのままの騒ぎを演じるほどだった<sup>38</sup>。40年にも、「皇威宣揚」や心身の鍛練を目的とする登山者が富士山に集い、「愛国行進曲に歩調を合せての登山」などもなされた<sup>39</sup>。引き続き41年も、富士山は「頂上に武運長久を祈る人々」であふれ、また、戦時下的な身体の鍛練のための「道場」とみなされた<sup>40</sup>。

富士山には、特に盧溝橋事件以来「皇軍の武運長久を祈願するための登山者が多」くなつたが、観光地として大衆化され俗化した富士山での祈願は相応しくないとの議論も起っていた。しかし、山頂に達すれば、「自然の靈氣に打たれるところには、平凡なる人的感情とか、登山気分を超越したインスピレーションを享受する」ことができ、武運長久祈願は、「平地に於ける神社の社頭に於て行ふそれよりも、遙に意義が多く、且つ心身の鍛練と、浄化の上に役立つところが少くないであらう<sup>41</sup>」との認識が広く受け入れられ、富士登山者の急激な増加をみた。富士登山は単なる観光やレクリエーション・スポーツから、一種の神事として人々に認識されることとなった。42年9月14日、吉田署において、山梨県保安課長などが出席し、地元町村関係者や関係業者など20余人が参加して開催された「富士練成郷」整備の座談会で、吉田署長は、富士登山については、「今後登山の語を排して登拝と称する」ことを提案し、一同の賛成を得ている<sup>42</sup>。

前章でみた防共富士登山は、38年の時点で、主催者の日独伊親善協会関係者が、次



年度以降継続して開催する意思のあることを表明していたが、第2回は39年7月あらたに蒙疆自治政府の代表者を加えて実施され、41年7月の第4回開催まで、第3回を除き史的に確認できる<sup>43</sup>が、こうした動向も、「登拝」といった語を生み出す精神世界、富士山の「靈性」のいわば戦時下の拡張によって支えられていた。

したがって、現実の戦局悪化は、「靈性」の縮小と表裏一体であり、登山者の減少につながった。43年以降、登山バスの運休、8合目と山頂の郵便局の閉鎖、富士講に対する山麓での案内の廃止、強力削減、登山シーズン終了を象徴する行事であった吉田の火祭りの簡素化、といった動き<sup>44</sup>が次々に起こった。

## 5. おわりに

富士山が持つ特性を歴史的に通覧するとすれば、その大きな特徴のひとつは、富士山が「靈性」を持つことである。人々は、富士山を山麓からは言うに及ばず、はるか遠方からも遥拝し、修験の場とし、靈気に触れて自身も靈性を獲得しようとしてきたことは、つとに指摘されているとおりである。しかし、近代に入ると、富士山は、「観光化」と「スポーツ化」というふたつの新しい特性を帯びようになる。観光化は、近世の富士講にすでにその萌芽が見られるが、周辺の景勝地と富士山を一体化し、これをいわば物見遊山の対象とした。また、スポーツ化は、明治以降近代的な登山の思想と技術が日本に紹介されるのと軌を一にしていた。

こうした靈性を持つ山、靈場としての富士山から、観光・スポーツの対象としての富士山への移行は、社会各局面における近代化の進行とともに、昭和初年まで緩慢に行われたものと思われ、上掲の、35年に『山梨日日新聞』に載った解説記事は、富士山も含めた山岳の観光化や登山のスポーツ化を如実に反映するものとなっている。記事に言うように、「社会生活の複雑化と、ビジネスの単調化」、それらから意思に反して逃れられない「籠の鳥」の一時の息抜きとして、人々は富士山に登り、山麓を周遊するようになっていたのであった。

しかし、盧溝橋事件の翌年、つまり本稿が課題としたふたつの富士登山が行われた昭和13年、1938年以降には、人々が富士山に求めるものは、ふたたびその靈性に返っているのである。『山梨毎日新聞』は、登山全体が減少傾向にあるなかで、富士山だけが多くの登山者を集めている理由について、「靈峰の靈気にふれて、戦時下国民と

しての精神力を養はんとする」ことにあるとしているのは、これも既に見たとおりである。単に体力の増進が目的であれば、別の方法、別の山でも良いのである。何故、富士山に登るのかの答えは、古代以来の「靈氣」、靈性にあるというのが、記者の認識であった。その靈性を求めて、関東大震災後の交通機関の混雑との相似性の中で語られるほど続々と詰めかけた登山者は、「皇威宣揚」を掲げ、表向き「皇軍」の、しかし脳裏に浮かぶ実体としては、おそらく父や兄、夫や我が子の武運長久を、山頂での一時、長時間の徒歩によるしかない登頂から開放された悦楽感のなかで祈願したのである。

以上のような観光・スポーツから靈性への回帰が実体化するにあたって、昭和13年のふたつの富士登山が果たした役割は、極めて大きいと言わなければならない。外国人、それも眉目秀麗な若者たちの富士登山は、多くの日本人の関心を引いた。実際、新聞各社は、在京の新聞も地元紙もこぞって記者を同行させて彼らの一挙手一投足を取材し、伝書鳩まで登場させて速報性を競い、ラジオは特別番組を編成して生中継し彼らの到着と歓迎を一場の祝祭に化したことは、既述の通りである。

ところで、そうやって迎えられた彼らが、表面上掲げたのは「防共」であり、「防共」を実現するための「盟邦」である日本や各国との「親善」であったが、実際に彼らが発信したものの、新聞などを通じて日本人に伝えたものは、実は富士山の「靈性」にほかならなかった。「防共盟邦親善富士登山」のドイツ人参加者が、下山後の御殿場で開かれた歓迎会で述べたのは、「世界の聖山富士山」(付点、筆者)に登山することの意義であったし、ヒトラー・ユーゲントにとっても、富士山はまず「聖なる山」としてとらえられ、富士山に登ることと天皇の居所たる「宮城」の「遙拝」とは、日本精神の表出する場、あるいはその行為化として、同一視されていた。

そして、遠来の外国人青年達のこうした反応は、日本側によるある種の誘導によって引き出されものであった点こそ見逃すわけには行かない。彼らの日程には、必ず神社の参拝が組み込まれ、山麓や頂上での集団的な行動は、浅間神社の神前でなされた。また、日本側は、絶えず富士山の「靈性」を強調した。歓迎会では、たびたび「靈峰富士」(付点、筆者)ないし類似の語が登場し、新聞記者でさえ、彼らの「日本精神」理解を何とか聞き出そうとした。そうしたなかで、たとえばヒトラー・ユーゲントの歓迎昼食会において語られた山梨県知事の富士山観は象徴的である。先に紹介した文言を再び記せば、そこでは、富士山は、「永劫動かざる我が日本国体の姿であり

純真明開なる日本精神の象徴」とされたのである。ヒトラー・ユーゲントが、富士登山を「宮城遙拝」と同一視したのは、富士山に対する毛ほどの誤謬も含まない全き理解であったと言うべきであろう。

観光やスポーツの対象としての富士山は、あだ花に過ぎなかった。「国民統合の象徴としての富士山」というドグマは、外国人ですら理解したものとして、この後、十五年戦争末期の日本を支配するのである。

## 《注》

- (1) 枢軸関係強化の流れに関しては、たとえば、三宅正樹『日独伊三国同盟の研究』南窓社、1975年。義井博「日独伊三国同盟と軍部」三宅正樹編『昭和史の軍部と政治 3 太平洋戦争前夜』第一法規出版、1983年、等参照。国内戦時体制の整備・強化の流れに関しては、たとえば、遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史』岩波書店、1959年。石川準吉『国家総動員史』国家総動員史刊行会、1975～1987年。雨宮昭一『戦時戦後体制論』岩波書店、1997年、等参照。
- (2) 中道寿一『君はヒトラー・ユーゲントを見たか?』南窓社、1999年。
- (3) 義井、前掲論文、参照。
- (4) 日独伊防共協定の成立は37年11月であるが、同年10月刊行の『朝日年鑑』昭和13年版の「団体一覧」の欄には、「日独伊親善協会」なる団体の掲載はない。しかるに、翌38年10月刊行の『朝日年鑑』昭和14年版の同欄には記載されているので、結成は37年未から38年にかけてということになる。尚、代表者は「顧問 子爵小笠原長生」となっている。
- (5) 主な書籍として、防共事情第一輯『防共読本』〔未見〕。同第二輯矢野征記（外務省情報部）『防共の話』1939年。徳富蘇峰『日独伊三国同盟一周年』1941年、等。
- (6) 『読売新聞』昭和13（1939）年9月21日第一夕刊「赤魔調伏に各宗派団結」。
- (7) 同前、7月18日第一夕刊「富士山頂に叫ぶ“防共バンザイ” 五ヶ国代表けふ登山」。
- (8) 同前。
- (9) 小笠原長生は、唐津藩主の後裔で、元海軍中将。退役後は東郷平八郎の顕彰活動などをおこなった。日独伊枢軸提携の強化、親善増進にもかかわらず、日独伊親善協会会長等をつとめた。市川銚造編『子爵小笠原長生』小笠原長生子爵喜寿記念編纂会、1943年、142頁。
- (10) 以下の事実経過については、特に注記が無い限り、『読売新聞』、『東京朝日新聞』、『山梨日日新聞』、『山梨毎日新聞』、『静岡民友新聞』のそれぞれ昭和13年7月18日から20

日までの関係記事を参照。

- (11) 外務省記録『満州国留日学生会館関係雑件』昭和13年7月14日付文部省専門学務局長宛外務省文化事業部長文書「満州国留学生夏期修練地二講師派遣方ノ件」。同「昭和十三年度及全特別期財団法人満州国留日学生会館事業実施報告書」。
- (12) 『東京朝日新聞』昭和13年7月19日「防共万歳 富士に燦七ヶ国旗」。文言に細かな異同があるが、7月19日付『静岡民友新聞』、7月20日付『山梨日日新聞』にも、宣言文が掲載されている。
- (13) 日独青少年団交歓会編『日独青少年団交歓事業概要』日独青少年団交歓会、1939年、49～60頁。
- (14) 同前、9～11頁。
- (15) 平井正『ヒトラー・ユーゲント』中央公論社、2001年、124頁。
- (16) 以下の事実経過については、特に注記が無い限り、『山梨日日新聞』、『山梨民友新聞』、『甲州時報』の昭和13年8月20日から24日までの関係記事を参照。ただし、一部必要に応じて記事タイトルを注記したものがある。
- (17) 『山梨民友新聞』8月20日「歓迎の辞 土井知事主催の昼食会の席上で」。
- (18) 前掲『日独青少年団交歓事業概要』65頁。外務省記録『各国青少年団及青年団関係雑件』昭和13年8月25日付内務大臣等宛山梨県知事報告「特高秘第九三七号 『ヒットラーユーゲント』訪日派遣団一行ノ来往二関スル件」。
- (19) 同前。
- (20) 『甲州時報』8月22日「初秋の山頂の感激 ユーゲント一行富士征服」。
- (21) 前掲『日独青少年団交歓事業概要』65頁。前掲、外務省記録『各国青少年団及青年団関係雑件』昭和13年8月25日付内務大臣等宛山梨県知事報告。
- (22) 外務省記録『各国青少年団及青年団関係雑件』昭和13年9月5日付内務大臣等宛長野県知事報告「特外秘収第一一五七六号 『ヒットラー<sup>ママ</sup>・ユーゲント』訪日派遣団代表団一行ノ来往状況二関スル件」。
- (23) 『山梨日日新聞』8月20日「沿道の盛観」。
- (24) 『山梨民友新聞』8月20日「岳麓に展開 日独若人の交歓」。
- (25) 『山梨日日新聞』8月20日「防共の契る固し 歴史的感激の一瞬」。
- (26) カール・ハイッツ・シュルツェ「ヒットラー・ユーゲントの日本印象記 山中のキャンプに於て」『旅』16 - 1、1939年1月、12頁。
- (27) 外務省記録『各国青少年団及青年団関係雑件』昭和13年9月8日付内務大臣等宛山形県知事報告「特外発第二二九二号 『ヒットラー・ユーゲント』訪日派遣団一行ノ来往二関スル件」。
- (28) 『山梨日日新聞』8月24日「日独魂の融合 シュルツエ団長車中で感激のメッセージ」。

- 29 『山梨日日新聞』 8月23日「けふの放送」。
- 30 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校編『綜合郷土研究』山梨県、1936年、490～491頁。小佐野子平『富士山とともに七十年』富士山小御岳神社、1972年、158頁。飯田文弥「富士北麓開発のあゆみ」富士急行50周年史編纂委員会編『富士山麓史』富士急行、1977年、131頁。『山梨日日新聞』昭和11(1934)年8月31日「富士総決算 合計七万一千余人 女は昨年より減少」。同、昭和12年8月2日「富士登山者総数 五万人程度」。同、昭和13年9月7日「富士登山清算」。同、昭和15年8月28日「念願『十万人』成る 今年の富士登山総決算」。同、昭和16年8月23日「寂しい今年の富士 昨年より二万人減少」。同、昭和17年9月7日「富士へ十九万人 男二、女三倍の増加」。同、昭和18年8月27日「富士登山は半減し 三ツ峠時代を現出」。
- 31 中島博『カンテラ日記 富士山測候所の五〇年』筑摩書房、1985年、81・83頁。
- 32 『山梨日日新聞』昭和10年8月2日「富士と南アに押し出す 登山客に潤う地元」。
- 33 『山梨毎日新聞』昭和13年7月19日「戦時夏山は霊峰富士へ 国民の赤誠果然殺到」。
- 34 『山梨日日新聞』昭和13年7月25日「富士登山記録破り」。
- 35 『山梨民友新聞』昭和13年8月22日「碑石を建立 国威宣揚 遂に目的果す」。
- 36 『山梨毎日新聞』昭和13年7月21日「駒、鳳凰へ 戦捷祈願行」。
- 37 『山梨日日新聞』昭和14年7月1日「霊峰頂上に剛弓絞る 防共登山に初の試み」。同7月4日「流石に時局反映 登山者もカーキー色」。同7月7日「甲種合格のお礼に登山」。同7月8日「岳麓登山祈願」。同7月17日「富士を埋む人の列 食料も売切れ騒ぎ」。同7月24日「既に三万七千人 山舎超満員」。
- 38 同前、7月14日「繁昌すぎて悲鳴 鉄道にみる山景気」。
- 39 同前、昭和15年7月3日「興亜登山風景 徒歩で頑張る青年部隊」。同7月29日「好天にお山は超満員 富士へ既に七万六千人」。同8月10日「待望の十万人突破 吉田口新記録樹立」。
- 40 同前、昭和16年7月7日「富士は鍛錬道場 登山者は目白押し」。同7月22日「雨天を冒して頂上征服 皇軍勇士の武運祈る」。
- 41 同前、昭和14年7月4日「言論 富士登山と戦勝祈願」。
- 42 同前、昭和17年9月17日「富士山内には天幕村許さず」。
- 43 同前、昭和13年7月20日「防共祈願祭を年中行事に 関係各方面に起る」同、昭和14年7月16日「けふ頂上の盛観 防共の若人富士へ」。同、昭和16年7月20日「けふ山頂祈願式 枢軸登山隊、雨の岳麓へ」。
- 44 同前、昭和18年7月5日「バスは運休、郵便局も廃止 富士登山の決戦体制」同、昭和19年6月29日「案内、乗馬を廃止 今夏富士登山の決戦体制」。同、8月25日「簡素の火祭り 富士の山仕舞ひ」。

## 付記

本稿執筆にあたって、山梨放送編成局テレビ制作部の土橋巧氏より、貴重な史料の提供を受けた。末筆ながら、ここに記して感謝の意を表したい。

富士登山の吉田口をかかえる旧福地村の行政文書については、所有者である富士吉田市に対して現在公開の請求を行っているが、本稿の執筆に間に合わなかった。後日に期すこととしたい。

本稿は、執筆者両名が共同して史料収集をおこなったうえで、「2 防共盟邦親善富士登山隊の防共富士登山」およびこれに関わる注を佐藤弘が、その他の部分を松本武彦が分担執筆したものである。